



自ら掴む経営エッセンス!

(記事: 渡部成夫 過去記事も読めます⇒<http://idoina.com>)

7/8(火)

テーマ: 『私のボランティア史』

出席42社43名

講師: 千葉市中央区倫理法人会 副会長 小林 明子 氏



Akiko Kobayashi

「母は私の100倍、いい人です」。B型の小林明子氏。

満州での過酷な戦争体験

小林明子氏は、太平洋戦争の末期、当時日本の植民地だった満州で生まれた。エンジニアをしていた父は現地召集を受け、日本が敗戦すると捕虜として、シベリアに送られた。父の生死もわからぬまま、母と二人、満州に残された明子氏は、終戦の時、9カ月だった。

終戦しても、日本への引揚船は、なかなか到着しなかった。その間、母は顔に煤を塗り、丸坊主にして、明子氏を背負いながら行商を続けたが、ソ連兵の目はごまかせず、恐ろしい目に何度も遭った。食べ物もない、極限状態で、生きた。

ようやく千葉に帰るが、父親も弟も亡くした母には、肉親が一人もいなくなる。唯一、3年後、奇跡的に旦那様(明子氏の父)が生還した。

平和交流を切望した父母と、私のボランティア観

「戦争での過酷な体験が、その後、(明子氏のお母様が)外国人留学生を親身に世話するようになった大きな動機になっている」(「留学生の母」伊藤光子さん より抜粋)。5歳の時母を亡くし、継母に育てられ、姉も高校の時病死し、7人姉妹の長男の嫁として、おしんのような生活を送る。

小林明子氏の家には、20カ国以上の外国人留学生が自由に入出入りする。父はハーモニカを吹いて、誰が来ても温かく迎えた。皆で一緒にご飯を食べ、帰る

時には必ず、母がお土産を持たせてあげた。いつも、ワイワイ・ガヤガヤの温かい家庭で、留学生達は、家に帰ったみたいと喜んでた。

「私のボランティアの本(もと)は、母」という小林明子氏は、現在、株式会社伊藤水道の経営に携わりながら、お母様がしてきたように、たくさんの外国人留学生を受け入れ、また自身も32カ国を訪れて、国内外を問わず、数え切れないほどのボランティアをしている。例えば、O. K. Bojiという日本人がいて、その関係でネパールで、貧しくて教育の機会のない子供たちのために、学校を創った。また、ネパールは山が多く、病人が病院へ運ばれる間に、亡くなってしまうケースも多いので、病院に寄付金で口座を作り、病気の子の手術費用にあてる寄付もしてきたという。

自身の活動について、小林明子氏はこう語る。「自分では、ボランティアをしているという意識は、ないんですね。ただ心の赴くままに、気付いた時にはもう動いてる。後で、もし困っているのが自分の家族だったら皆助けるだろうな、と振り返ることはあるけど、その時は何も考えていないんです。人間的な温かさが、一番大事。人に、何かしてあげられるということは、心が豊かになり、すごく楽しいことです」。

高速道路で交通事故のケガ人に救急法をする。倫理での出会いも大切に、すぐにお礼状を送る。小林氏はいつでもどこでも即行即止、明朗だ。

一番大切な人へ

父は、小さな会社の経営者だったが、77歳のお祝いの会も、会社の人々が自発的にしてくれ、辞めた人も何人か来てくれた。本当にたくさんの人がお祝いに来てくれた。

引揚船の中で、「親子同士でも食べ物を取り合うほど、生きるために必死の時。私はあなたが小さくて助かったわ」と言ってくれた母の記憶。

最初に外国人留学生が来ると、「うちは、1回来ても100回来ても同じよ。あなたはゲストではなくて、私の家族だから」と言って、一緒にお茶碗を洗ってもらいます。

富士高原研修所には、自分の一番大切な人へ手紙を書く講座がある。小林氏は、亡くなったお母様に、手紙を書いた。それをこの場で読み、聴かせてくれた。

次回 第885回MS! 7/15(火)6時~7時+朝食会 ホテルニューオータニ幕張(043-297-1777)

テーマ 「つづけることのすばらしさ」 講師 (社)倫理研究所 首都圏方面長 井上茂勝 氏

できるできるやればできる!

明るく楽しくなければ倫理じゃない!

・会員120社・MS30名以上・美浜を美しく